2020年7月5日
聖霊降臨節第6主日

家庭礼拝のための

聖書・牧会祈祷・メッセージ

【 聖 書 】

ローマの信徒への手紙１５章２２節～２９節 （新約聖書 ２９６頁）

【牧会祈祷】

命の源である神様

あなたはこの世界を創られたとき「よい」と言って、満足されました。私たちを創られたときも、満足してくださったはずです。私たちは自分の欠けばかり気にしてしまいますが、神様が「あなたは十分だ」と言ってくださる、その御声をいつも聞くことができますように。

私たちは自分の今日のことを計画します。そして、これから先の人生のことをも計画し、その通りに進むことがよいことだと思っています。しかし、私たちの人生を導かれるのは神様です。自分の願う通りに進めたいという傲慢さをお赦しください。それによって人を傷つける私たちの弱さをお赦しください。今週､私たちが過ごす日々に、計画通りにいかないことがあっても、その時こそ神様がご用意くださった道だと信じることができますように。

今、自宅で療養している友が多くいます。どうか神様、私たちの友の体を癒やし、心を元気づけてください。家庭礼拝を守っている友がいます。友の家をあなたの御言葉が響く生活の場としてください。新型コロナウイルスによって世界中の人々が恐怖や混乱、不安の中におかれています。私たちは、この時代にあって祈るつとめを与えられているはずです。神様、病を負う人々を治してください。別れもままならなかった、ご遺族を慰めてください。医療現場で働く人々は疲弊しつつ、それでも治療にあたっているはずです。日々、神様がお支えくださいますように。

軽井沢幼稚園が今週も愛の業をなすことができますように。そこで働く人々を神様が祝福してください。

このお祈りを主イエス・キリストのお名前を通して御前におささげいたします。アーメン。

【メッセージ】

ローマの信徒への手紙を書いたパウロは、世界で一番有名な伝道者でしょう。しかし、そのパウロは全くの苦労知らずであったわけではありません。今日の聖書の22節にはこうあります。「こういうわけで、あなたがたのところに何度も行こうと思いながら、妨げられてきました」。パウロはローマの教会に行きたいと前々から考えていたようです。しかも原文のニュアンスでは、考えていたのは一度や二度ではなく、何度も計画したけれども断念せざるを得なかったようなのです。それは、神様の阻みでした。

聖書の他の箇所でも、神様が阻んだできごとが記されています。マタイによる福音書 28 章にある復活の場面です。　墓に行く最中、婦人たちが想像していたの石によって、死によって、イエス様との出会いが阻まれるということでした。しかし、人が想像する阻みは、神様によって取り除かれるのです。石も、死も、神様にとって障壁にはなりません。むしろ、彼女たちを止めたのは、天使とイエス様ご自身でした。イエス様はすがりつく女性たちに言います。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる」と。人が想像しうる阻みをどうするか悩み、過去をどう克服すべきか悩み、後ろ向きだった彼女たちをイエス様は止めます。そこに捕らわれる必要はない、と。むしろあなたは先に進みなさい、ガリラヤへ行きなさい、そこで私と出会うはずだと促すのです。ガリラヤは弟子たちの故郷ではありましたが、一度は捨てた土地です。どうして帰ってきたのだと後ろ指を指される可能性もあるでしょう。困難が待ち受けていることは誰もが分かっていました。しかし、イエス様は「そこでわたしと会うことになる」とおっしゃったのです。

パウロはこのイエス様の言葉を伝え聞いていたのかもしれません。彼は、イスパニアへ行って伝道することを夢見ています。しかし、それは叶えられませんでした。神様に阻まれるのです。あなたにとってのガリラヤはそこではない、と。

パウロがこの手紙を書いた後に行った先はエルサレム教会でした。彼はエルサレム教会の貧しい人々のために献金を持って行きます。マケドニア州とアカイア州の人々が、エルサレムの貧しい人々に心を寄せ、献金をしていたのでした。パウロはここで「異邦人はその人たちの霊的なものにあずかったのですから、肉のもので彼らを助ける義務があります」と言いますが、パウロにとっても苦しい言い訳であったかもしれません。エルサレム教会という、ユダヤ人キリスト者の総本山で、異邦人教会を認めてもらう意図があったのでしょう。

伝統あるエルサレムの教会が貧しさの中に陥っている、それを異邦人教会が助ける。そこには越えられない心のわだかまりがあるはずです。キリストによってひとつとなったのだから、同じ兄弟なのだからと説得しても、人のあれこれにしがみついている限りでは、神様の赦しにあずかることなどできません。結局パウロはエルサレムでユダヤ教徒に襲われ、その後捕らえられることになります。ローマには行くものの、囚人として見張り付きという状態でした。

しかし、神様はその困難こそ、あなたのガリラヤだ、と言うのです。キリストによって一致できない、過去にとらわれ、神様を阻む、そのところこそ、あなたが必要なのだ。そこをあなたの働き場とするようにとおっしゃるのです。

パウロはこう言います。募金の成果を確実に手渡した後、あなたがたのところを経てイスパニアに行きます。そのときには、キリストの祝福をあふえるほど持って、あなたがたのところに行くことになると思っています、と。

私は私のガリラヤに行く。しかし、そここそ、神様の赦しの深さ、愛の深さを知る場所だとパウロは言うのです。だから、キリストの故にあふれるほどの祝福を持ってあなたに会えると確信に満ちています。

私たちの今いる場所は、困難なところかもしれません。しかし、だからこそあなたに行ってほしいのだと、神様が送り出されたのです。あふれるほどの祝福を受けるために。